



八千代市立大和田南小学校

校長 田中一成

1 はじめに

令和2年は、新型コロナウイルス感染症が子どもたちの学校生活を、そして、これまで親しんできた常識を根本から塗り替え、新しい生活様式に移行せざるを得ない事態を引き起こした。この他にも、世界に目を向けるとたくさんの問題が起きている。今、こうしている間にも紛争が起き、貧しくて学校に行けない子どもたちが大勢生まれている。地球の環境も悪化の一途をたどり、多くの動物や植物が絶滅の危機にさらされている。

本校は、開校以来、社会科と生活科の研究に取り組んできた。令和元年度からは、これまでの研究教科である生活科、社会科に加え、総合的な学習の時間、交流及び共同学習、イマージョン学習の研究に取り組み始めた。何事もそうであるが、今まであるものを変えず、同じように行えば失敗することも少なく、比較的容易に取り組むことができる。しかし、それではたくさんの課題を抱える厳しい時代を自らの力で切り開いて生きていく「生きる力」は育たない。

本校は、2015年国連のサミットで「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標を達成するための次の社会の担い手である子どもたちを育てていくために新しい生活様式に合わせた教育活動に取り組んでいるところである。

2 今、学校がやるべきこと

(1)「学校の教育目標」の再点検

カリキュラム・マネジメントを効果的に進めるためには、何を目標として教育活動の質の向上を図っていくのかを明確にすることが重要である。新学習指導要領の施行に伴い、本校の教育目標である「世界に生きる」をキーワードとしたグランドデザインを次の4点から再点検をした。

- ①「持続可能な社会づくり」の視点が含まれているか。
- ②地域の実態や、目の前の子どもたちの個性や持ち味に基づいているか。
- ③「社会に開かれた教育課程」の理念をしっかりと踏まえているか。
- ④「全国学力・学習状況調査」の結果を活用しているか。

(2)カリキュラム・マネジメントを充実するための組織作り・学校づくり

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学校は、新しい生活様式を取り入れるとともに、学習内容や活動内容を工夫していく必要がある。そのために校務分掌を見直し、各教職員を適切に配置して役割分担を明確にすると共に、相互の関係性を明らかにして協力体制を推進する組織となるように改善を図っていく。

3 本校での具体的な取組

本校では、地域や子ども本位の学校運営を行うためにカリキュラム・マネジメントとして次の3点に取り組んだ。

(1)教科等横断的な視点で、教育課程を編成する。

第5学年 ESDカレンダー

教科	4年生	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	5年生
国語				しょうかいズスターを作ろう			世界遺産 四国八幡の歴史				ひみつを調べて発表しよう		
算数													
理科			植物の形や特徴の成長			植物の葉や種子のふにのぼらぬ						流れる水のぼらぬ	
総合				大雨を育てよう								メディアフラッシュ	
社会科		世界のなかの国や地域のくらしと特徴	国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	わたしたちの国や地域のくらしと特徴	
外国との連携学校行事													
音楽													
図画工作													
体育													
家庭科													
道徳													
外国語													
学級活動													

社会科や国語科などそれぞれの教科がバラバラに授業をしていては、これからの時代に必要な能力が育たない。各教科が足並みをそろえて授業を行う必要がある。しかし、ただ単に各教科が足並みをそろえるのではなく、コンテンツ・ベース(内容：知識重視の教育)からコンピテンシー・ベース(能力：資質・能力を育成する教育)への転換を意識したものでなければ

ならない。すなわち「何を教えるか」から「何ができるようになるか」という転換を図らなければならない。

本校では、コンピテンシー(能力)による教科等横断を図るために、全学年ESDカレンダーを作成し、国際理解教育への取組を中心にしながらも、各学年に合わせた実践を計画的に組み立てている。教育課程を通じて全校で取組を進め、6年間を通して子どもたちを育てている。

(2)実践を可能とする資源(人・金・物・時間・情報)を確保する。

ユネスコスクール加盟の最大のメリットは、ネットワークを活用し、人とのご縁を生かしながら地域に、そして、世界に開かれた教育課程づくりを進められることである。ネットワークを生かし、外部人材を積極的に活用することにより、教員にはない専門的知識・技能が学習でき、キャリア教育にもつながるようにする。

【3年 総合 ESDめがねをかけて考えよう!】



五井平和財団や生活科教育研究会とのつながりをきっかけに、横浜市のユネスコスクール等ともつながりをもつことができ、新しい単元開発につなげることができた。

生活科から総合的な学習の時間がはじまる3年生において、ESDの視点をもって物事を見ることが出来る力をつけさせるための単元「ESDめがねをかけて考えよう!」はその成果の一つである。

【4年 総合「Let's clean the sea」～世界の海のために私たちができること～】

4年生が行った「Let's clean the sea ～世界の海のために私たちができること～」は、総合的な学習の時間を中心として、以下に示したように社会科や特別の教科 道徳、理科、国語科がそれぞれの教科の垣根を越えて、足並みをそろえて行ったものである。各教科で育てた力は、全部が重なり合って、一人の子どもの全体的で総合的な力となる。

- ・社会科「水はどこから」「ごみの処理と利用」「地域の特色を生かした産業(銚子の漁業)」
- ・特別の教科 道徳「自分たちができるエコ活動」

- 理科 「私たちの体と運動」
- 国語科「ウミガメの命をつなぐ」



4年生 ゲストティーチャー
葛西臨海水族園調査係

子どもたちは、国語科「ウミガメの命をつなぐ」の学習後、自分が興味をもった海の生き物の生態やその生き物が直面している問題について調べた。

学習をさらに深めるために、ゲストティーチャーとして葛西臨海水族園から調査係をしていての方に来ていただき、お話を伺う機会を設けた。その方は、水族園で飼育する魚な

どを捕まえるために世界中の海を回っているそうである。実際にそこで目にしたことを子どもたちに話してくださった。子どもたちは、海の生き物の生態を知るとともに、人間が排出したごみが、地上だけでなく海の生態系にまで及んでいることにも気付いた。



Web 会議システムを使ってのプレゼン



リサイクルボックス作り

子どもたちは、学んで終わりにするのではなく、一人一人が目標をもって身近なことから変えていったり、友達と一緒に行動を起こしたりしはじめた。Web 会議システムを使って「ごみを減らすためにできることは何だろう」というテーマのもと、クラスごとにプレゼンテーションを行った。左上の写真は、他の3クラスに向け、自分たちがどんな取り組みをしていくかを説明しているところである。他の3クラスは、各教室で電子黒板の映像を見ながら説明を聞いている。昨年度までならば、学年全体が体育館に集まって行うところなのだが、「3密」を避けるために、今回はこのような方法を取った。右上の写真は、実際に活動をするための準備に取りかかっているところである。クラスごとに数名ずつのチームに分かれ、ポスターを作成したり、ペットボトルのキャップ、古紙、古服などを集めたりしてごみを減らす運動に取り組んでいった。

【5年 総合的な学習の時間 つながる・つなげる・大南米】

5年生の社会科では、稲作について、総合的な学習の時間では、お米の歴史や種類、料理、作り方などについて調べ、田植え、稲刈り、脱穀などの一連の米作りを体験し、農家の方々の工夫や苦労をじかに味わってきた。

米作りでは、脱穀した後に残るのがわらである。昔の人は、このわらを捨てずに上手に活用してきた。「わらへび」もその一つである。都市化が進む八千代市においても、古くから伝わる風習

がまだまだ残っており、その中の一つが「ツジギリ」である。自分たちのムラ（地区内）に外部から侵入する疫病や災疫である鬼を防ぐため、ムラ境の辻(十字路)に大きな口を開けたわらで作った大蛇を飾る。この大蛇がムラを守るための役割を担っている。



今回の「わらへび」作りを行うにあたって、5年生担任も子どもたちに指導ができるようにするため、郷土博物館の職員と一緒に「わらへび」作りをされている方のところに伺い、事前にレクチャーを受けてきた。また、わらについては、学校で収穫したものだけでは5年生児童全員の分を賄いきれないので、つてを頼り、農家の方にご提供いただいた。以前、わらは、鎌で刈り取り、おだかけをしていたので比較的手に入りやすかったが、今では、コンバインで刈り取ってしまうので貴重なものとなってしまった。今回の活動で作り上げた「わらへび」は、子どもたちがそれぞれの家庭に持ち帰った。きっと子どもたちが丹精込めて作った「わらへび」は、それぞれの家庭を災いから守ってくれることだろう。

【6年 総合 アートマイル国際協働学習プロジェクト】

アートマイルは、海外のパートナー校とインターネットを使って「教育」「平等」「環境」など世界共通のテーマについて対話的・協働的に学び合い、世界に訴えるメッセージを込めて一枚の壁画(1.5m×3.6m)を半分ずつ描いて共同制作する国際協働学習である。



これまで6年生の子どもたちは、クラスごとに自己紹介や日本の伝統文化などについて調べたことを動画やプレゼンテーションにして電子フォーラムにアップし、情報を共有してきた。

ギリシャとの話し合いの中で決まったテーマは、「コロナが広まる中、SDGs 達成のためにできることは何か？」である。子どもたちは、このテーマを形にすべく壁画の制作に取り組んだ。壁画の原画は、クラスごとに作成し、候補となる絵を持ち寄り、話し合いで決めた。また、ギリシャから下絵のデザイン画が送られてきたので、それぞれのよいところを取り入れ、実行委員の6年生が再度原画を描き直した。絵のコンセプトは、2020年という時代に生きている私たちから、SDGs 17の目標を達成する年限と定められている2030年の未来の人たちに、目標を達

成した地球を手渡そうというものである。



(3) 英語を国際交流のツールとして活用する。

現在、学校で学んでいる子どもたちが社会に出て活躍するであろう 2050 年頃、日本は、多文化・多言語・多民族の人たちが、協調と競争をする国際的な環境の中にあることが予想されている。英語は、海外のユネスコスクールとつながるためのツールの一つである。本校では、子どもたちの英語力を高めるために、全学年でイマージョン学習に取り組んでいる。

「イマージョン」は immerse（浸すこと）から来ており、イマージョン学習は文字通り子どもたちを外国語にたっぷり浸からせながらその言語の習得を目指すバイリンガル教育の手法の一つである。外国語をただ単に学ぶことを目的とするのではなく、その言語を図工や体育など様々な教科を学習するための「手段」として用いているのが大きな特徴となっている。

<5年 家庭科 小物づくり>



上記の写真は、学級担任がイマージョン学習で家庭科を行っているところである。45分間、指導者が発する言葉はすべて英語である。子どもたちは、英語を耳で聞き、その様子を目で確かめ、どんな活動をすればよいのか理解している。

イマージョン教育を行うメリットは、次の4点である。

- ①英語の力を伸ばすことができる。
- ②英語の力を身につけられると同時に、算数や図工、体育などの教科学習の力も身につけることができる。
- ③日本とは異なる外国の文化を受け入れることができる。
- ④一つ一つの英単語はわからなくても、全体の意味をつかむことができるようになり、理解能力を伸ばすことができる。

本校が目指す英語学習の最終的なゴールは、ユネスコスクールとして行う6年生の国際交流学

習である。英語を「手段」として活用し、外国の学校と国際交流を行っている。

<2年 体育 表現遊び「わくわく動物ランド」>



2年生の体育学習のなかに「表現遊び」という学習がある。表現遊びは、鳥や魚、動物園の動物などの動きの特徴をとらえて、跳ぶ、回る、ねじる、はう、走るなど全身の動きで、そのものになりきって即興的に踊る運動遊びである。今回の学習では、「進化じゃんけん」などいくつかのゲーム的要素を取り入れた活動内容で構成した。子どもたちは、担任の話す英語での指示を聞き取り、どんなルールで、どんなことをするのかを理解し、すぐさま活動に入ることができた。先生の話の全部はわからなくても、部分、部分の知っている英単語から全体の意味をつかむことはできていた。

イマージョン学習には、課題もある。その一つが、教科書がないことである。そのため、本校では、英語主任をチームリーダーとして学級担任と英語専科、ALT(外国語指導助手)、CTA(英語活動助手)が連携をしながら全学年が年間1教科1単元の教材を開発して実践を積み重ねている。45分の授業を行うためには、通常の教材研究にプラスして英語の教材研究も行わなければならない。ゼロから作り上げるので時間と労力が必要となってくる。

3 おわりに

ユネスコスクールとしての取組が徐々に近隣の小・中学校のみならず、保育園や幼稚園、市内全域の小・中学校に認知されるようになってきた。また、保護者や地域の方々にも広く知られるようになってきた。認知度の広がりとともに、学校の活動に快く協力して下さるようになってきた。子どもたちの活動が、学校内だけにとどまらず、地域へと広がりを見せるようになってきた。

本校では、長年生活科・社会科を研究教科として継続してきた経緯を踏まえ、「単元のねらいが持続可能な社会の担い手を創ることとどう関連しているのか」という視点からアプローチしてきた。アプローチをするときのキーワードとなるのが「ESD めがね」である。ESD めがねをかけ、4つの視点で物事を見ることができるようになれば、子どもたち一人一人が、自然や社会に関わる様々な地球規模の課題を自らの課題として捉え、一人一人が自分にできることを考え、実践していくようになる。そのために留意しなければならないのは、「教科を教える」から「教科で学ぶ」への意識の転換である。

「コンピテンシーで教科等を横断する」ことを実現するためには、各教科が子どもたちにどのような能力を育てるのか、今まで以上に日々教材研究を積み重ね「教科の本質」をしっかりと認識していかなければならないと考える。